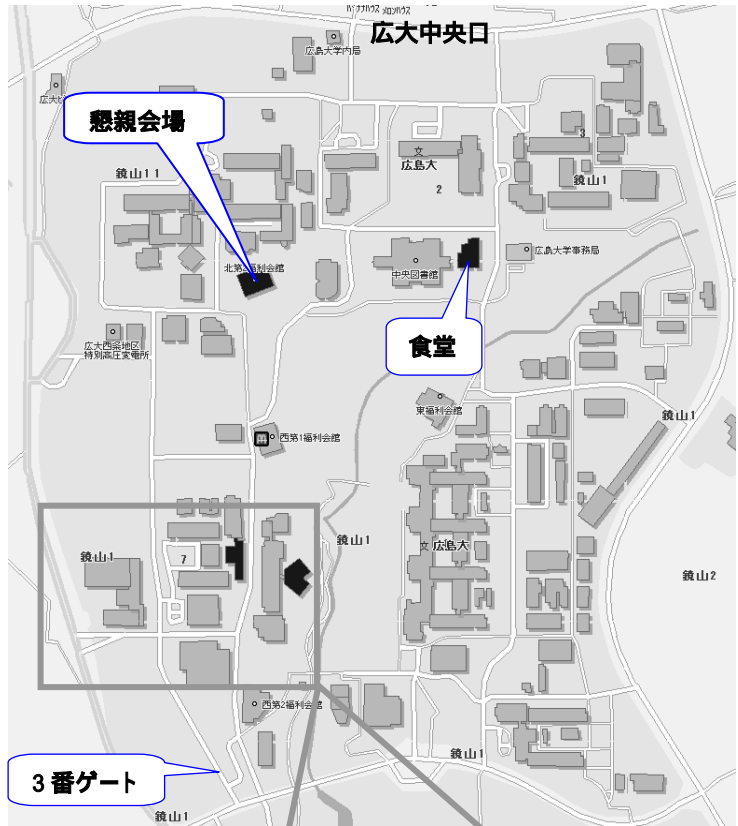


《会場へのアクセス》

JR 山陽新幹線・東広島駅より
土日はバスがありません。
タクシーで約 1,600 円程度
(行き先: 総合科学部)
JR 山陽新幹線・広島駅より
広島駅 (山陽本線 岡山方面へ: 35 分) JR 西条駅
(「広島大学」行きバス 広
大西口で降車: 20 分) 広
島大学
バス時刻表: <http://www.geiyo.co.jp/Unyu/daigaku.htm#sun>
広島空港より
広島空港 (連絡バス: 15
分) JR 白市駅 (山陽本
線 広島・岩国方面へ 2 駅:
10 分) JR 西条駅 (「広
島大学」行きバス 広
大西口で降車: 20 分) 広島大学
山陽自動車道 西条 IC より
駐車場が利用できます (3
番ゲートが便利です)。



会場 (総合科学部)



東広島市内の宿泊施設情報

施設名	参考料金 (シングル1泊2日)	電話	施設紹介 URL (宿泊施設提供以外のものもあります)	コメント
藤乃家旅館	¥15,000 ~	082-423-2423	http://hh-kanko.ne.jp/shop/fujinoya/	山陽本線西条駅近くの割烹旅館です。
東広島グリーンホテルモリス	¥5,145 ~	082-493-7070	http://www.hotel-morris.co.jp/higashi-hiroshima/	山陽本線西条駅付近で、市街の近くです。 全室 LAN (有線・無線) 対応
ホテルサンライズ 21	¥6,000	082-431-3232	http://hh-kanko.ne.jp/shop/sun21/	山陽本線西条駅付近で、市街の近くです。
ホテルグランカーサ	¥5,980	082-421-3111	http://hh-kanko.ne.jp/shop/gran_casa/	山陽本線西条駅付近で、市街の近くです。
ホテルイーグル	¥5,280	082-422-5590	http://hh-kanko.ne.jp/shop/eagle/	山陽本線西条駅付近で、市街の近くです。
東広島シティホテル	¥5,400 ~	082-422-8686	http://www.knt.co.jp/ec/2004/jsbba2004/6.htm	山陽本線西条駅付近で、市街の近くです。
国民年金健康保養センターひがし広島	¥6,121 ~	082-422-8211	http://hh-kanko.ne.jp/shop/nenkin/	広島大学至近です。その分、市街からは少し遠いです。
ホテル KAMO	¥4,980	082-422-1101	http://www.hotel-kamo.com/	西条駅・東広島駅・広島大学の中間点のため交通は不便ですが、温泉があります。
西条グランドホテル	¥5,250	082-426-0721	http://hh-kanko.ne.jp/shop/saijogh/	山陽新幹線東広島駅近くです。その分、広島大学や市街から遠いです。

参考料金は、一般的な価格です。日程、予約方法等によって変更がある場合がございますので、あくまで目安としてお考えください。

広島大学東広島キャンパス、山陽新幹線東広島駅、山陽本線西条駅の周辺や、それらの地理的な距離関係は、右の地図と次のようなものです。

- ・ 広島大学周辺：学生を対象とした飲食店が中心です。
- ・ 西条駅周辺：東広島市街です。大学周辺よりももっと多種の飲食店などがあります。
- ・ 広島大学 西条駅：バス 20 分、タクシー 1,500 円強です。
- ・ 広島大学 東広島駅：土日にバスはありません。タクシーで 1,600 円程度です。

参考：東広島市観光協会 (<http://hh-kanko.ne.jp/>)



英語コーパス学会 第 27 回大会資料

日時:2006 年 4 月 22 日(土)午後 1 時より(正午受付開始)
会場:広島大学 東広島キャンパス 総合科学部 東講義棟(K)
(<http://www.hiroshima-u.ac.jp/>)
〒739-8521 東広島市鏡山 1 丁目 7 番 1 号

第 27 回大会プログラム

ワークショップ	10:15～11:45 (9:45 受付開始)	西講義棟(J) (J307 CALL 教室)
《品詞タグ付け入門：基礎と実践》		講師 後藤 一章(大阪大学大学院生) 石部 尚登(大阪大学大学院生)

会 場 総合科学部 東講義棟(K) K108 講義室
受付開始 12:00
開 会 13:00

会長挨拶
開催校挨拶
総会
事務局からの連絡

司会 赤野 一郎(京都外国語大学)
中村 純作(立命館大学)
達川 奎三(外国語教育研究センター教授)

研究発表 1 13:35～14:05 司会 日臺 滋之(東京学芸大学附属世田谷中学校)
ライティングにおける産出速度から見た定型表現の検討 —動的コーパス構築の試み—
阪上 辰也(名古屋大学大学院生)
村尾 玲美(名古屋大学大学院生)
松野 和子(名古屋大学大学院生)
森田 光宏(山形大学)

研究発表 2 14:05～14:35 司会 五百蔵高浩(高知女子大学)
形態論研究に対する大規模コーパスの有効性 —形容詞由来の抽象名詞を例として—
森田 順也(金城学院大学)

研究発表 3 14:35～15:05 司会 保坂 道雄(日本大学)
BNCにおける *haven't* NP の諸相
園田 勝英(北海道大学)

休憩 15:05～15:25

シンポジウム 15:25～17:40 《文学テキスト分析におけるコーパスの利用》

司会 小迫 勝(岡山大学)
美学的文体論とコーパスの問題点 —D. H. Lawrence の文体的特徴とイメージ構築—
講師 西村 道信(大手前大学)

Joseph Andrews における伝達部と発話の表出について

講師 脇本 恭子(岡山大学)

Faerie Queene における脚韻語の用法とコーパス利用 —ラディガンドのエピソードを中心として—

講師 小迫 勝(岡山大学)

閉会の辞

中尾 佳行(広島大学)

懇親会 18:00～17:45

《北第2福利(生協) 会費：4,000円》

発 表 要 旨

【ワークショップ】

品詞タグ付け入門: 基礎と実践

後藤 一章(大阪大学大学院生)

石部 尚登(大阪大学大学院生)

品詞タグはコーパス分析において最も基本的かつ重要なアノテーションの 1 つである。品詞タグが付与されていれば *flow* のように名詞と動詞が同形の単語も区分して検索することが可能であり、語彙リストも各品詞別にきめ細かく作成することができる。品詞タグを付与するツールは「品詞タガー(POS Tagger)」と呼ばれ、自然言語処理の分野で研究が進められており、フリーウェアとして公開されているものも少なくない。しかし、公開されている品詞タガーの多くは実行に UNIX やコマンドラインの知識が必要であり、Windows の GUI(Graphical User Interface)形式に馴染んだユーザにとって使いやすいとは言い難い。そのため、品詞のタグ付けをしたいと思いつながら実現できないという状況が少なからず存在するのではないと思われる。また、品詞タグ付与のためのテキスト整形や、タグ付きテキストの効果的な検索には正規表現を駆使する必要があるが、これも容易な作業とは言い難い。そこで本ワークショップは、こうした技術的な問題に焦点を当て、品詞タグ付与における一連の作業が各自で処理できるようになることを目的とする。

ワークショップの前半(石部担当)では、タグ付け実演の前段階として、品詞タグ付けの理論的な背景を含めた、言語研究における品詞タグ付けの意義について概説する。また、現在公開されているいくつかの品詞タガーについて簡単な紹介を行う。

ワークショップ後半(後藤担当)では、「マウス操作の品詞タガー」をテーマに作成した品詞タガーの紹介とその操作方法を解説し、参加者の方々に実際に品詞タグの付与を行っていただく。この時、品詞タグ付与のための基本的なテキスト整形や、コンコーダンスツールを用いた検索の方法も併せて解説し、最後に品詞タグの限界(誤処理)とその対応方法についての検討も行う予定である。

【研究発表 1】

ライティングにおける産出速度から見た定型表現の検討 —動的コーパス構築の試み—

阪上 辰也(名古屋大学大学院生)

村尾 玲美(名古屋大学大学院生)

松野 和子(名古屋大学大学院生)

森田 光宏(山形大学)

近年、学習者コーパスの量的・質的な分析から、学習者の産出時における表現の特徴が明らかにされている。特に、学習者が産出した定型表現の量や種類の違いについては、Granger (1998) や杉浦 (2000) といった多くの研究がなされている。しかしながら、一連の研究で扱われる定型表現の認定は「頻度のみ」を基準としている。本研究の出発点は、頻度のみから定型表現を認定してよいのかという疑問にある(本研究では、「定型表現」をひとまとまりとして慣習的によく使用されている表現と考える)。

本研究は、頻度という認定基準に、「産出速度」という基準を新たに加え、定型表現の抽出と検討を試みるものである。この研究目的を達成するため、新たな研究手法として「動的コーパス」の構築を行い、産出過程の量的・質的分析を行った。動的コーパスには、既存のコーパスでは記録されていない、英作文の産出過程が記録されている。

被験者は、日本人英語学習者(大学生)26名である。産出過程のリアルタイム記録システムを用いて、「公共の場での喫煙」というトピックで作文をさせた。記録システムによって得られたデータを動的コーパスとみなし、 \langle 期待速度(1ストロークの平均速度 \times 文字数) \rangle と \langle 産出された n-gram 表現の観測速度 \rangle との比較を行った。頻度 10 以上であった 7 個の n-gram 表現について比較を行った結果、6 個の表現は、期待速度よりも速く産出される傾向のあることが明らかとなった。しかしながら、実際には、期待速度よりも遅く産出される表現も観察されており、頻度の高い n-gram 表現が、必ずしも定型表現と認定し得るわけではないことが示唆される。

【研究発表 2】

形態論研究に対する大規模コーパスの有効性 —形容詞由来の抽象名詞を例として—

森田 順也(金城学院大学)

近年、大規模コーパスを統語論研究に使用する試みがなされ、その有効性が論証されてきたが(cf.「特集：コーパス言語学の現在」『英語青年』2004年2月号)、本発表では、コーパスに基づく生成形態論研究へのアプローチの有効性を検証する。

生成形態論の目標は、語彙獲得の事実—子供が限られたデータを基にして短期間に語彙を獲得すること—を説明することにある(cf. Chomsky (1986))。目標達成のための接近法として、語彙部門にリストされる項目、即ち子供が覚えなければならない項目の数を減らし、未登録の項目を規則や条件によって導き出す方法が従来採られてきた(cf. Allen (1978), Marantz (1997))。このアプローチを支持するためには、①リストされていない複雑語—派生語や複合語—が多く存在すること、②一般的条件に従って語形成が行われること、③ある語形成規則の適用がライバルの規則の適用を阻止し、これによって「無駄な」情報が語彙部門から排除されること、の3点を明らかにする必要がある。

本発表は、大規模コーパスから得られる形容詞由来の名詞を用いて、①—③を例証しようとするものである。具体的には、Lehnert (1971)(逆引き辞書)と OED を使用して -ity 及び -ness 派生語のリストを作成した後で、BNC を検索して、各派生語のトークン数、-ity 派生語が付加しやすい基体形(X-able, X-al など)に関する -ity/-ness 派生語の頻度、及び -ity と -ness の「二重語」(density - denseness)の頻度を調査する。

【研究発表 3】

BNC における *haven't* NP の諸相

園田 勝英(北海道大学)

15世紀にはじまった助動詞 *do* の発達によって多くの動詞の否定が Verb *not* から *do/did not/n't* Verb に変わったが、この変化が完結していない最後の領域のひとつに *haven't* NP がある。例え

ば、Huddleston and Pullum の *Cambridge Grammar* (2002:112)では *I don't have enough tea.* と並行して *I haven't enough tea.* が「方言」によっては可能であることが示されている。ただし、どのような方言かについては全く記述がなく、単に同書において“grammatical in some dialect(s)only”を示す%の記号が例文の前に付けられているだけである。この *haven't NP* については従来よりコーパスに基づく研究が続けられているが、BNC 全体をコーパスとして用いた研究はないようである。本発表では、まず 1990 年代のイギリス英語のマイクロコスモスとしての BNC において *haven't NP* が示す分布および文法的特性についての調査結果を提示する。これを基に、Huddleston 達が言うところの「方言」とは何かを検討する。また、地域的社会的変異が歴史的变化と密接な関係があることはよく知られているが、調査結果が *do* の歴史的発達を研究する上でどのような意味を持つかということについても考える。さらに、このテーマを通して、BNC が文法研究あるいは語法研究に対して持つ可能性の限界を探ってみたい。

【シンポジウム】

文学テキスト分析におけるコーパス利用

司会 小迫 勝(岡山大学)

電子テキストおよびコーパスの充実ぶりは目覚ましいものがある。それに伴って、シンプルな電子テキストの利用に止まらず、タグ(標識)を付与した電子テキストを利用して、新たな言語事実が明らかにされてきている。このような刺激的な動向を目の当たりにして、個々の文学作品を言語の有機体として捉え、固有の言語芸術を構築している仕組みを鑑賞し、研究している者は、少なからず落ち着きの悪さを覚えていよう。そこには、次のような意識が絡んでいると思われる。つまり、文学作品をペーパーテキストによって味読しつつ、ことばの相互作用の仕組みを分析・総合し、解釈する過程を研究の原資とする言語的文体論において、コーパスの利用はどのような貢献をするのであろうか？電子テキストを利用する場合、果たして、このような研究に必要とされる情報のすべてにタグ付けが可能であるのか？あるいは必要であるのか？タグ付けが不可能だと思われる要素があるとすれば、それはどのような要素であるのか？タグ付けのないシンプルな電子テキストおよびコーパスの利用により、どのような情報が得られ、それがどのように貢献するのか？などである。そこで本シンポジウムでは「文学テキスト分析におけるコーパスの利用」を共通のテーマとして、作品の言語分析に際して、コーパスの利用がどのように貢献するのか、その可能性と限界について、以下の3講師が、それぞれ異なる時代の英国詩人・作家を中心に、実践例を報告する。

美学的文体論とコーパスの問題点

—D. H. Lawrence の文体的特徴とイメージ構築—

講師 西村 道信(大手前大学)

本発表の目的は、コンピュータと電子テキストを利用して、Spitzer の提起した美学的文体論をどこまで追求できるかということである。

コーパス利用による文体論と言え、一般的には統計・計量文体論などを連想し、どうして

も量的な面に注意を払う傾向がある。確かに、これにはそれなりの重要性があることは、これまでの研究成果からも明らかである。しかし、キーワードをそのような観点からだけで探り出そうとするのではなく、頻度の低いものでも重要となるという認識も必要であろう。

文学作品の場合は、あるイメージを形成するのにそのイメージを表す語が直接には現れず、間接的にそのイメージを形成している場合がよく見受けられるので、文学作品の理解には、先ず「読みありき」ということを念頭に置くことから始めなくてはならない。このような観点から、D. H. Lawrence の *The Captain's Doll* を中心に、他の作品とも比較しながら、この作品の文体的特徴に迫ってゆく。電子テキストとタグを利用することによって、美学的文体論、言語事実に基づく文体論を、新たな形で示せるのではないかと考えている。

Joseph Andrews における伝達部と発話の表出について

講師 脇本 恭子(岡山大学)

The Rise of the Novel (1957)を著した Ian Watt も述べるように、英国の小説の歴史は、Daniel Defoe, Samuel Richardson, Henry Fielding をもって始まるとされる。彼らの作風・文体には類似の跡がほとんど見られないが、それまでの散文とは異なり、現実の社会・人物像を写實的に描写した点、すなわちリアリズムを追求した点において共通している。さて、小説にリアリズムを演出するのに重要な役割を担うものの1つにそれぞれの登場人物の発話が挙げられるが、各発話が直接話法、間接話法など、どのレベルで伝達されているのか、さらには伝達部がどのような働きを持つのか探ることは、時代の傾向のみならず作家の文体的特徴を明らかにしていくことにつながる。

本発表では、発話の表出と伝達部の機能・構造について、Fielding の *Joseph Andrews* (1742) を分析の中心的資料として論じていく。分析にあたっては、Fielding による他の作品 *Shamela* (1741)はもとより、Defoe の *Robinson Crusoe* (1719), Richardson の *Pamela* (1740), Goldsmith の *The Vicar of Wakefield* (1776)など、*Joseph Andrews* の前後に書かれた18世紀の作品数篇の電子テキストを随時活用して比較・検討する。Fielding の文体的技巧の一端を明らかにするとともに、コーパスの有用性と課題を併せて検討する。

Faerie Queene における脚韻語の用法とコーパス利用 —ラディガンダのエピソードを中心として—

講師 小迫 勝(岡山大学)

アマゾンの女王ラディガンダが登場する E. Spencer (1552?-99)の『妖精の女王』(*The Faerie Queene* 1596)第5巻は、主人公の騎士アーティガルが公正(justice)の徳を具現すべく遍歴の旅をする物語である。旅の途上、アーティガルは、当時の時代通念に逆らって男性を支配し、隷属させたい欲望に満ちたラディガンダと戦う。この女王に関わる種々のエピソードを語るに当たって、語り手は様々なことばの工夫を施している。本発表は主に脚韻語に見られる工夫を明らかにする。そのために、脚韻語使用の基準を想定し、その基準を背景として、逸脱する用法を前景化として着目する。特に、背景(基準)としての男性韻から逸脱して前景化された女性韻、或いは韻律により強勢が促進されて押韻する、いわゆる、促進韻について、コンテキスト(デイ

スコース)との関係性を探り、パターンの所在を明らかにする。その際に、鍵となる脚韻語について、主に同時代を中心とするコーパスの利用が、どのようにこれらの用法の位置づけに貢献するのか明らかにする。その他、二重統語法、ことば遊び、脚韻構造の逸脱、句跨りなどについて触れながら、文学テキストの分析におけるコーパス利用の有用性と課題について報告する。

《大会参加者へのご案内》

- 駐車場が利用できます(キャンパスの南西3番ゲートが便利です)。
- ワークショップの受付は西講義棟(J)(J307 CALL 教室)で**午前9時45分**から行います。
- 大会の受付は東講義棟(K)1階ラウンジで**正午**から行います。
- 昼食につきましては、北第1福利(生協)をご利用ください。
- 校内は分煙措置がとられています。ラウンジの喫煙室をご利用ください。
- 会員でない方も、「当日会員」として参加していただけます(1,000円)。

2006年3月8日 発行
編集・発行 英語コーパス学会
代表者 中村 純作
事務局 〒615-8558 京都市右京区西院笠目町6
京都外国語大学 赤野一郎研究室内
TEL: 075-322-6103 FAX: 075-322-6246
E-mail: i_akano@kufs.ac.jp
URL: <http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/index.html>
